

論文審査の結果の要旨

平成 29 年 2 月 21 日

氏 名：李 莹

論文題目：中国人日本語学習者の「V テモイイカ」文の研究

本研究は、「動詞+てもいいか」（「V テモイイカ」文）を、中国人学習者がどのように習得していくかについての実証的研究である。教育現場で学習者の誤用に接したことに端を発し、先行研究を十分に理解した上で、談話完成テスト（DCT）を用いて調査を行い、横断的分析と縦断的分析を行い、学習者が習得した知識について考察した。

「V テモイイカ」文は、言うまでもなく「V テモイイ」の疑問文である。「V テモイイ」の先行研究では、「許可」「可能」「承諾」など多くの機能を持つことが人称との関係から明らかにされている。近年、その疑問文「V テモイイカ」は、その表現意図や発話行為的側面が語用論的な観点から明らかになってきた。

本研究はこうした先行研究に基づいて、「V テモイイカ」文に関する学習者の形式上の知識と、表現意図上の知識、使用におけるストラテジーの知識の 3 つを明らかにすることを課題とし、そのために DCT を用いて調査した。ここでは、「依頼」「指示」など 6 つの場面と、「親疎」と「上・同・下」という 2 種類の対人関係の要素から 2 組を設定し（例えば依頼の場面で「親上」「親同」）、日本語母語話者と中国人学習者がどのような発話をするかをデータとして採取した。そして正用文と誤用文を横断的・縦断的に分析した。

その結果、形式上の知識については、縦断的分析により学習者が「行為者が話し手」という知識を構築することが明らかになった。表現意図上の知識については、横断的分析では、「依頼」「指示」「宣言」「許可求め」の意図が表出されているものの産出率は低いことが明らかになった。一方、縦断的分析から「依頼」と「指示」の産出が向上することがわかった。ストラテジーの知識については、横断的分析からは呼びかけと謝罪の表現を伴い、相手に負担をかけることの理由の説明しながら依頼などを行ったという結果が、縦断的分析からは日本語の能力とストラテジー上の知識の間に関連性が見られないという結果が得られた。ここでは日本語母語話者との対照もなされ、興味深い結果となっている。

本研究での考察は、調査の範囲内で学習者の知識の構築を明らかにしており、日本語習得研究と教育研究に寄与したと言える。今後、今回の調査対象とは異なる学習者にも調査を行うことにより、「V テモイイカ」文のさらなる研究へと発展することが期待される。

本審査委員会は提出論文に対して十分な評価を与え、口述審査会において要点が明確に提示され、適切な質疑応答がなされたことを高く評価した。

以上から、博士の学位に十分値するものと判断して合格とした。

主査： 人文科学研究科 吉田 朋彦

副査： 人文科学研究科 岡崎 眸

副査： 人文科学研究科 高見澤 孟

副査： 人文科学研究科 綾部 裕子

副査： 大連外国語大学 陳 岩